

続

徒然
つれづれ

健康の有り難み

桑野 巍

気候がよくなったら一人旅にでも出よう——と思っていたら、とんでもない旅になってしまった。それは病院への“入院旅”で楽しいとはいえず、面白さも味わえなかった。私は右目が緑内障で大手の病院へ入院、手術した。20数年前、京都総局に勤務していた時、右目の調子がよくないので近くの眼科医を訪ねた。視力、眼圧、眼底、視野などの検査を終え「緑内障です。早く治療しないと大変です」と医師に宣告された時はがっくりとしたものだった。

医師からの指示で目薬を1日3回さし続けた結果、回復は早かった。何度かの転勤があったが生活にも仕事にも支障はなかった。ところが今年夏ごろから右目が霞むことが多くなり、近隣の眼科医に通ったが一向によくならない。一時は3種類の目薬と2種類の飲み薬の世話になったが不自由から抜け出せなかった。医師から手術をすすめられ、「この際」と思って手術を選んだ。

一見強気の男も実は弱虫で泣き虫だ。「目の手術は痛いだろう」が頭の中をよぎったが「失明覚悟」の気持ちが台頭、専門医に委せることにした。大阪・福島区の病院に二日間通院し、徹底的に事前検査して9月9日入院、翌日手術、同月14日無事退院した。

手術室の天井には明るい電灯が照り輝いていたが当の本人は極度の緊張状態が続いた。右目眼球は事前に局部麻酔しているものの、自分の心臓の鼓動がスピーカーから流れて耳に入り無気味。もちろん医師の言葉ははっきり聞きとれる。手術の途中、医師から「目の球を動かしてはだめ。指示する方向をじっと見つめなさい」と厳しく注意され「1ミリの何分の1かの手術なんだよ。しっかりしてよ」と怒鳴られる場面もあった。怖さで目の焦点が定まらずキョロキョロしている自分が情なくなり、意思の弱さを暴露してしまったわけだ。

「人の病を治して喜んでもらえる」という医師の真剣さは伝わってきたものの、意気地なしの自分に嫌気がさした。他人に話せばごく軽い笑い話で終わるが、当の本人にとっては深刻そのもの。約40分間の手術終了後、医師の「よーし、うまくいったぞ」という声が聞こえた時は正直安堵した。

専門的には目の中の線維柱帯を切除して房水の流れをよくする手術だったと聞いた。房水というのは目の中を循環しながら、角膜や水晶体に必要な栄養分を運んでいる液体のことだが、この房水の排水口が目詰まりしてスムーズに流れなくなり、眼圧が高くなって目が痛くなったり、霞んだり視野が狭くなるのが緑内障だという。最近は40歳代から発症する人が増え、年齢が高くなるに従って有病率も高くなっているとも聞いた。

一時的に痛い思いをしたが、術後は何を食べてもよいこともあって、病院では三食とも普通食だった。しかし、入院中は右目に眼帯をしているのでテレビを見たり、新聞を読むのが若干不自由だった。病室での主な仕事は決められた時間に目薬をさすことで、ほかにはやるのが特になく実に退屈だった。

毎朝午前5時ごろ目が覚め「左目はよく見える。不思議だな、神秘だな」を感じ「いずれ右目も見えるだろう」を信じた。病院の地階にはコンビニがあるので何かと便利だった。目覚めてそっとベッドを抜け出し、風のない廊下を静かに歩いてコンビニへ行く。朝刊を、という店員は「6時半ごろ来る」という。これが待ち遠しかった。私が入院中、テレビからは首相が突然退陣などのビックニュースが映し出され、同室の患者も驚いていた。

病院では過剰なサービスを期待してはならないが、病院を取り巻く環境は厳しいらしい。それでも医師、看護師、事務などの連携はきちんと機能しており、安心と安全が最優先されている。大病院はサービス産業だろうが、きびきびした態度や言葉遣いに感心した。いよいよ退院の日がきた。「おめでとうございます」から始まる「退院後の留意点」のコピーを頂戴し、病院のスタッフに感謝した。

その後右目の視力は徐々に回復、ほぼ元通りに見えるようになり、今健康の有り難さを痛感している。病の話は他人や自分を暗くしてしまうが、今回の短期入院生活で「わが身のいたわり策」を学ばせてもらった。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）